バハイの学術

ホセイン・ダネシュ

私は、今日、このすばらしい大会に参加できて非常にうれしく思っています．万国正義院のメッセージ、日本バハイ全国精神行政会の言葉、大陸顧問のすばらしい講演、これまでに発表された論文、同じく優れたその通訳、暖かく愛情こもった司会、大会そのものの組織――そのどれを取っても、まことにすばらしい．この席にいれることは、光栄であります．

今日は、バハイの学術という課題についていくつかの考えについて話したいと思っています．すでにその核心の部分については、幾人かのスピーカーの方により述べられました．バハオラは、真理を追求するよう、われわれに呼びかけておられます．この原則自体、すでに新しい世界への扉を開いていることです．人は、真理を独自に追求するように要求されているのです．われわれは、小さい子供に探求することを要求はしません．探求する能力がない人にその要求はしないのであり、成熟した、能力のある人にそれを要求するのです．つまり、言いたいことは、次の通りです．神が、われわれ人類に、新しい時代に到達したことを告げておられること、これをバハオラが、はっきりと意味しておられる、と言うことです．この時代は、人類の成熟の時代です．それゆえに、真実を探求することが、われわれの責任であり、特権であるのです．

そこで疑問として浮かぶのが、どのような真理をわれわれは追求すべきか、ということです．バハオラは、科学には根本的に言って、二種類あると述べておられます．原典のアラビア語で、Ilm'ul Abdan、 va Ilm'ul Adyan［物質の科学と精神の科学］と言います．物質の科学は、物質世界に関係するものです．この世界にあるものはすべて、物質とその相互関係により構成されています．そしてわれわれが知っている、そして実践している科学というものは、その本質において物質世界の科学のことです．物理学は、物質の異なる要素の関係について研究する分野です．生物学は、物質世界の生命現象について描写します．社会学は、社会における人々の関係と状態について描写します．このような分野はすべて、この物質的生活に関連するものです．したがって、物質（物質的なもの）に関する科学は、バハオラが実在すると言っておられるふたつの科学のひとつであります．

もう一方の科学は、精神的なものに関する科学です．精神性に関する科学は、今日、人間世界で根本的に誤解されている巨大な知識の分野です．精神性の科学は、一般的には、意識の現象、特にpsyche[プシュケ／サイキー]としての人間の意識に関連するものです．Pyscheとは、魂を意味します．それで、心理学［psychology］について語るとき、われわれは本当は、魂の科学について語っているのです．しかし、唯物主義的な世界は、非物質的実在を取り扱うことができないゆえに、サイキ、意識、魂の科学を頭［mind］と脳の研究で置き換えたわけです．つまりわれわれは、精神的なものを物質化したわけです．他にも精神的な科学の分野があります．たとえば、道徳的価値や祈り、神と人間との関係、人間同志の関係に関する研究などです．これらの様々な科学は、科学の精神的な領域に属するものです．バハオラが、これら両方の研究分野に対して、両方とも「科学」［英語ではscience］という言葉を使っておられるのは、興味深いところです．この点についてはまた後ほど戻って参ります．

アブドル・バハは、ふたつの箇所で、科学と宗教を同じように描写しておられます．原典

のペルシャ語で、彼は、科学は"Ravabete-i-Monbaetheh az Haqayeq-i-Ashyaa"であると述べておられます．これは、「物事の実在性から生じた関係」という意味です．つまり、科学は、物事の実在性から生じた関係であるのです．われわれが、物事の実在を理解していないことを悟ることは重要です．たとえば、われわれは、物質やエネルギーの実在性を知ることはできません．われわれが理解していることは、その特質や特徴であり、それらが互いどのように相互作用するか、と言うことです．ここで、アブドル・バハは、科学は根本的に言ってこのような特徴や相互関係の研究である、と言っているのです．これらの特徴を理解するとき、われわれは自然の法則を発見します．それから、われわれはこの新しい見解をものを建てたりすることやテクノロジーに応用するわけです．

アブドル・バハは、宗教を全く同じ言葉で定義しています．宗教は、物事の実在性から生じた関係を発見する過程である、と言うのです．それ故、アブドル・バハにとって、科学と宗教は同じものであるわけです．両方とも、物事の実在性に焦点をあてているのです．しかし、宗教と科学は、ふたつの異なる見地から焦点をあてています．一方は、物質的な見地からであり、もう一方は、精神的な見地からです．たとえば、人間に関して言えば、心臓や肺臓、脳、その他様々な器官の関係について取り扱う科学があります．それで、生物学、生理学、解剖学、医学、遺伝学などがあるわけです．これらはみな、人間の身体に関連する科学です．あるいは、人間の実在性の別の局面についても研究できます．たとえば、人間の意志の交換の仕方、選択の仕方、決断の仕方、などです．これらが、魂についての研究です．人間の魂、サイキには、三つの能力があります．知る能力、愛する能力、そして選ぶ能力（意志の力）です．精神性について研究すると言うとき、われわれは、人間がどのように知り、どのように愛し、どのように選んだり決断をしたりするかについて研究すること、そして健全な状態、あるいは不健全な状態で人間の知識や愛や意志がどのように進歩するかについて研究することを意味しているのです．したがって、人間は、物質的見地と精神的見地の両方から研究できる主題であります．

さて、もうひとつ（三番目の）重要な要素があります．バハイ信教の守護者、ショーギ・エフェンデイは、バハイ信教はその方法において科学的である、と述べておられます．つまり、何をするにしても、科学的方法を用いなければならない、と言うのです．科学的方法には、特別な性質があります．つまり、科学者たちは、実在性を理解する試みにおいて、いくつかの前提条件を満たさなければならないのです．まず最初に、科学者は、偏見をなくし、先入観を横へ置き、開かれた目と心と頭で現象を観察しなければなりません．二番目に、科学者は、謙虚でなければなりません．真の科学者は、真実を、それがどこから来ようと、いかなる傲慢の兆候やかけらもなしに、受け入れなければなりません．真の科学者は、謙虚であり、偏見がないのです．このような科学的方法と真の科学者を特徴づける性質は、非常に重要です．それらは、科学者たちが、他の科学者たちと十分に協力し、いい関係を保ち、見解を交換し、共に真理を探求することを可能にしてくれるからです．この真理の探求が、まさに科学の究極の目的なのです．さらに、われわれは、真理をその最終的な形態において知ることは決してできないことを知っています．ゆえに、科学者は常に、新しい事実を知り、古い事実を捨て去る構えでいるのです．

過去の諸宗教がおかした過ちは、それらが進化しなかった、ということです．諸宗教は、科学的方法を用いず、その結果、知識があるレベルで停滞してしまい、進歩しそこなったの

です．それらは、それら自身の間に調和と和合を創り出すことができませんでした．互いに対立していたからです．バハイ信教の独自性は、物質的現象と精神的現象の両方に科学的方法を応用することを要求する、と言うことです．
バハオラは、「真の探求者の書簡」において、真の探求者の特徴と、科学的方法に即したアプローチそのものについて、非常にすばらしい描写をしておられます．バハイ信教について勉強するあらゆる人、そして科学を勉強するあらゆる人は、その「書簡」を読むべきです．それは、科学的方法と科学の特質に関する、最もすばらしい描写であるからです．

「．．．おおわが兄弟よ、真に道を求めようとする者が、日の老いたる者の知識に通じる道に足を踏みいれようと決心するなら、まず最初に、神の内奥の神秘の啓示の場である自身の心を清浄にし、後天的に得たすべての知識という光をさえぎる塵や、悪魔のような幻想の化身どもの暗示を払い除かなければならない．真に道を求めんとする者は、敬愛する御方の永続的な愛の聖所である自分の胸中を、あらゆる不浄なものから聖別し、自らの魂を、水と粘土に属するあらゆるものや、すべての影のようなはかない愛着から清めなければならない．愛が人をして盲目的に過ちに傾かせ、あるいは憎しみが、そのものを真理から追い払わないように、愛憎いずれの残しも残らないように、求道者は、己の心を大いに清めなければならない．」（「ケタベ・イガン」英語版 p.192、邦訳版 p.205）

さて、科学と宗教、または精神性に目を向けるとき、われわれは、バハイの学術には、次のふたつの目的があると言えましょう．つまり、科学を精神化させ、科学的方法を宗教に適応させることです．科学を精神化させるプロセスは、科学を進歩させるだけでなく、科学が人類世界の改善のために使用されることを可能にします．言い替えれば、それは、科学的知識の悪用を防ぐことになるのです．今日、世界の最悪の惨事のひとつが科学の悪用であることを、われわれは知っています．あらゆる戦争が、科学的知識の悪用により、さらに恐ろしいほどに破壊的になっています．爆弾や銃、環境汚染といった、あらゆる所に住む人類を巻き込む惨事に目を向けるとき、われわれは、これらの惨事がすべて、科学の悪用による結果であることに気づきます．バハイの学術の目的のひとつは、科学を精神化させることであり、そうして科学と技術の悪用に終止符を打つことです．ある意味では、科学の精神化とは、科学を平和という奉仕において使うことだ、と言えるでしょう．

もうひとつの目標は、科学的方法を宗教に応用させることです．科学の悪用に加えて、人類の身に降り懸かったもうひとつの惨事は、宗教が人類に対してなした行為です．宗教間に戦争を引き起こし、敵対感、不平等や不正を引き起こしたのは、宗教的教義や宗教的指導者らの盲目、そして宗教的大衆の迷信などです．と言うわけで、バハイの学術のふたつの主な目的とは、科学の精神化と、科学的方法の宗教への応用であるのです．こうして、科学と宗教の間に調和ができるのです．

バハイの学術には、根本的に言って、ふたつのアプローチがあります．ひとつは、応用アプローチであり、もうひとつは純粋な、概念的アプローチです．応用アプローチの方は、われわれは今までに、一世紀あるいはそれ以上使用してきたものです．この期間の間、バハイは、多くのことをしてきました．その結果について、われわれは研究すべきです．バハイの学者は、それらについて調査を始めるべきです．たとえば、約百年間、バハイは、世界共同

体という集まりを建設することに従事してきました．われわれはこの共同体に目を向ける必要があります．つまり、それはどのように作動するのか、それはどのようにしてその独特な性質や特徴、多様性や調和を創り出したのか、それらの特徴とは？共同体内のメンバーの互いに対する態度に影響する共同体の背後にある課題とは何か？こういった研究課題です．この共同体は、ただの集まりではありません．これらの人々は、異なる国、異なる背景、異なる社会の階層、異なる言語や宗教から来た人たちです．しかし、われわれはなぜか互いを愛し、お互いと完全に結びつけられています．われわれは、互いに永遠の昔から、知り合ってきたかのように接します．実際は、われわれの幾人かは、以前、会ったこともない人たち同志なのです．この大会にこれらの顔が集まったのも、これが初めてでしょう．われわれのほとんどは、互いの名前を知らないかもしれません．私は数日後には、香港である、別の会合のために出発しますが、そこでも、以前会ったことのないまた別の人々の集まりに会うわけです．しかし、それは、私が彼らを常に知っていたかのような出会いとなるでしょう．それから中国へ行きます．そこでは、過去三カ月の間にバハイになった人たちに会うことになっているのですが、そこでも、私は、彼らと昔から友達であったかのように接し、意志を疎通させるでしょう．このような共同体ができた理由とは一体何なのでしょう？われわれはそれについて研究しなければなりません．われわれは、それがどのような意味を持つのか、理解しなければならないのです．

応用学術のもうひとつの例は、われわれバハイが、これまでパイオニアという活動に従事してきたことです．つまり、バハイが自分の国を出て他の国、異なる社会に住むということです．人々がこのように世界中を動き回ることはどのような結果を生みだしたのでしょう．世界中どこへ行ってもペルシャ人のバハイに出くわします．これはどういう意味があるのでしょう？またどこへ行ってもアメリカ人バハイに会うことができます．どういう意味があるのでしょう？このような人々が、世界中に散らばっていることには、どのような意味があるのでしょう？このような人々の動きは、この世界の和合に対して、どのような意味を有しているのでしょう？私がこれから述べることは、かなり正確な推測だと思うのですが、将来、世界の和合についての歴史が書かれるときには、バハイのパイオニア活動が、世界の統合、多様性における統合をもたらすのに貢献した最も顕著なもののひとつとして考慮されるであろう、と思うのです．

この現象は、バハイによって研究されるべきです．なぜなら、バハイの人たちは、非常に勇気あること、つまり全世界を自分の物として宣布したことです．これが、バハイがしてきたことです．彼らは、世界が彼らに属し、彼らが世界に属するのだ、と決めたのです．つまり、どこへ行こうと、そこが彼らの家なのであり、誰に会おうと、自分たちの姉妹兄弟なのであり、それで全く居心地よく感じるのです．これは、ユニークで、“ノーマル（正常）な”行動です．それを異常と呼んでも構いません．世界中どのバハイも正常とは言えません．私はこれを、精神科医として述べているのです．バハイは皆、異常です．しかし、異常であることは、われわれを不健全にするわけではありません．実際、今日の世界で健全な人たちというのは、異常なのです．世界は病気にかかっており、頭も心も病気なのです．それゆえに、異常であることには、全く問題ないのです．

その他の研究の例は、ジャングルや村や山で、何世紀、何千年もの間、階級制度社会で生活してきた人々の間で、精神行政会を設立させる過程です．そのような人々は、誰かに命令

されて、疑うこともなくそれに従って行動してきた人々です．そこへバハイが行き、あたかも奇跡が起きたかのごとく、ある村や町で９人のバハイが生まれると、行政会を設立します．これは驚くべきプロセスです。なぜなら、行政会が設立されるや否や、われわれは、一千年、二千年、あるいは五千年という伝統から離れ、人間業務管理の新しいアプローチを創り出すのだからです．われわれは男性と女性を一緒にし、普通の人とその指導者たちを一緒にし、誰も他の人よりも優れているとは言えない、と述べるのです．そのグループは共に、決定を行います．これは、集団的な進化においてまだ幼児期にある人々を、人類の成人の時代にもたらすことにおいて、大きな影響力を及ぼすと、私は考えます．バハオラは人類は今成人期を迎えているとおっしゃっています。守護者は、われわれは今ちょうど、その人類の成熟期の前の段階、青年期の最終段階にある、とおっしゃいました．しかし、ちょっと世界を見回しただけで人類全体としてはその段階に達していないと分かります。世界には、まだ、何千年も前の標準に応じて生活している人々がいます．しかし、このような地域へ行って、短い期間に行政会を設立し、協議の方法を具現し、人々に普遍的な意識を与えると、これらの人々を、三千年や五千年の間の阻止されていた発展状態から成熟の段階に引き上げるのです．これは、未だかつてなかったような意識昂揚の実験です．これの実験は、研究を必要とする実験なのです．

それから、バハイ学術には、純粋に理論的な次元があります．ここでも、バハイは、非常に重要な尽力を行うことになります．たとえば、われわれは、平和な世界をつくりたいと思っています．これは、別に新しいことではありません．人類は常に世界に平和のあることを望んで来ました．平和は、まさに歴史の始まったときから、人類の切望の対象だったのです．人類の歴史を遡ってみれば、人々は常に平和について語り、それについて夢見、それを欲してきたことに気づくでしょう．しかし、人類はこれまでに、平和を確立することはできませんでした．人類はこれまでに、この心から望んできた目標を達するすべを見いだせなかったのです．さて、疑問は、なぜそうできなかったか、です．われわれバハイは、バハイ信教の文書を読むことができます．そこには、平和の秘訣が書いてあります．われわれは、なぜ平和がこれまで実現しなかったかについて答え、そしてどうやって平和を確立できるかを描写する、理論的な知識の体系を確立せねばなりません．

バハオラは、こうおっしゃっています．平和とは、追い求めるものではなく、むしろ、ある状態の結果である．そしてその状態とは統合［または、「和合」］の状態である、と．つまり、平和が確立されるには、統合という前提条件がまず満たされねばならない、と言うことです．では次に疑問となるのが、どうやれば統合を達成できるか、です．なぜなら、大抵の人たち、ほとんどの理論家、特に政治学者たちは、統合ということを恐れています．彼らは、統合は危険なものである、と言います．統合を達成させようとした人々を見よ、と彼らは言います．歴史に見るヒットラーやスターリンのような人々は、統合を実現させようと試みた人々です．統合は正しいものではない．統合は可能でない、と言うのです．彼らの言っていることは、正しいことです．そのような統合は正しくはないのです．われわれが求めているのは、別の種類の統合です．

バハイで使われている用語は、「多様性の中の統合」です．しかし、この統合の前提条件となるのは何なのでしょう？正義は、統合の前提条件となり得るでしょうか？バハオラは、「正義の目的は、統合を出現させることである」と述べています．つまり、統合された世界

を望むならば、正義が必要なのです．バハオラの説明は、まだ続きます．バハイ行政秩序の全構造は、正義院の設立に基盤を置いています．バハイ信教の行政秩序が正義に基盤を置いていることは偶然の出来事ではありません．地方精神行政会は、成熟すると、地方正義院となります．全国精神行政会についても同じです．それは将来、全国正義院となるのです．もちろん、周知の通り、万国正義院はすでに存在しています．では、なぜ「正義」なのでしょう？それは、われわれが統合を確立できるためには、正義が必要だからです．われわれバハイは、この事に十分な注意を払っていなかったかも知れません．われわれは真に統合された共同体をつくりたがっている、そしてなぜそれが実現しないのか、不思議に思っています．それはおそらく、正義という統合の前提条件のひとつを満たしていないから、実現しないのでしょう．われわれのうち何人が、正義ある人はどういう人か、について勉強したことがあるでしょうか。正義ある行政会とはどういう意味か、については勉強したことがあるでしょうか？いくつの行政会が、自分達は正義を正しく施行しているかどうかについて協議しているでしょうか？正義とは一体、何なのでしょう？それはわれわれが今取り組まねばならない理論的、そして実践的課題なのです．われわれは、今やこの前提条件となる現象について考慮しているので、もうひとつ別の疑問を投げかけなければなりません．平和の前提条件が統合であり、統合の前提条件が正義であるなら、正義の前提条件とは何なのでしょうか？

われわれは、今、応用してみてどのように作用するかを見れるような、理論の体系を作ろうとしているのです．さて、正義を確立するためには、平等が必要です．平等なしには、正義はあり得ません．アブドル・バハが、世界の平和は、男女の平等が確立するまでは、そして確立されなければ、起こり得ないと言われたことは、当然なことなのです．それは、最も重大な不平等問題は、男女間の不平等だからです．これが最大の不平等です．女性が、人間社会の行政において男性と同等の立場に立つまでは、正義はないでしょう．そして正義を得るまでは、統合は起こらないでしょうし、統合が起こるまでは、平和は実現しないでしょう．では、平等については、どのようにすれば、よいのでしょう？平等には前提条件があるのでしょうか？われわれは、どうしたら平等をつくりだせるでしょう？平等には、他人を自分よりも優先させる能力が必要とされるからです．そして、他人を先に考えるには、人は、自分自身のアイデンティティを確実に把握していなければならないからです．男性が女性に対して不平等な態度を取るのは、男性が恐れを抱いているからです．彼らが恐れているのは、自分について自信がないからです．言い替えると、男性は未熟なのです．

つまり、男性は未熟であるゆえに、女性が進歩した段階まで達していなのです．そして、これには、理由があります．男性は、恐れているゆえに、自分達が持っている権力の保持に一生懸命になります．彼らは、もし権力を放棄したら、すべてが自分達から奪い取られるのではないか、と恐れているのです．そして彼らが権力に固執する限り、彼らは個人として真に成熟することはないし、結果として平等も実現しないのです．

われわれは、この権力という現象について、理解しなければなりません．バハイの諸原則が「新世界秩序」に導入されることにより起こる最も劇的な変化は、おそらく、人間社会の主流から権力が奪い取られるであろうと言うことです．アブドル・バハも言っておられるように、歴史的に言うと、人類世界は、権力を通して運営されてきました．権力にはいくつかの特徴があります．社会が、権力を通して管理されると、ある行動が、その社会の個人の中に生じます．まず、権力を有する人は、安心感を確保するために、さらに権力を求めます．

この態度の問題は、権力を持てば持つほど、人は不安を感じ、またその権力を守るためにもっと努力が必要になると言うことです．結果として人は、危険信号が出るまで、常に権力の増大を図らねばならず、ついには危険の段階を越えて戦争や殺害にまで暴走してしまうわけです．

権力により生じる第二の事柄は、世界をグループに分割してしまうということです．権力中心に考える人は、すべて物事を二分に分けて見ます．善と悪、女性と男性、この国とあの国、科学と宗教、などです．すべてが分割され、世界全体が、闘争の場［闘技場］、人々が常に競争し、権力を求めて奮闘する場として見なされるのです．世界はジャングルであり、このジャングルに住む人々は身を防衛し、自分達の権利のために戦わねばならないのです．このように、権力を中心とする人、権威主義者は、世界を二分割して見るのです．権力中心の人のもうひとつの特徴は、このような人は、閉ざされた頭［マインド］、閉ざされた心、閉ざされた家庭を持っていると言うことです．「閉ざされた頭」で私が言わんとしていることは、新しい考えを容易に受け入れないと言うことです．彼らは、古い考え方に固執します．閉ざされた心の意味は、自分達と異なる人を受け入れることに、大きな困難を感じるということです．このような人たちの間では、統合という状態は生じません．閉ざされた家庭は、人々が歓迎されない、と言うことです．同じように世界全体でみると、今日、他の人々に対して頭や心や家庭を閉ざしてしまった社会があります．歴史的に言って、世界全体が、権力という原則に応じて運営されてきたし、今も継続されて運営されているのです．さらに、権力の特徴として挙げられるのは、権力中心の人や家庭や国は、あらゆる人がそれに順応することを要求する、ということです．人は家庭や社会の法律や慣習に合わせなけれなばらない、さもなくば、懲罰を受け、拒絶されるわけです．権力中心主義が、歴史を通して、人間社会の行政の主なやり方でありましたし、今もなお、主要なやり方なのです．

バハオラは、無権力の時代が来た、とおっしゃいました．［短い］日々の必須の祈りで、われわれは、毎日、こう言います．「おお、わが神よ、あなたが私を創り給いましたのは、あなたを知り、あなたを崇拝するためでありますことを証言いたします．今こそ、私の無力なことと．．．［を証言いたします］．」これは非常に顕著な言明であります．どうして世界全体はこれほどに権力に没頭しているのでしょう？どうして世界全体が、誰が誰よりも力があると言うことの証明に努めているのでしょう？どの国が、どのブロック［圏］が、そして、どのイデオロギーが、より有力か？――こう言ったことの証明に躍起になっています．世界全体が権力に没頭している、しかしバハオラがやってきて、無権力の時代が到来したとおっしゃる．無権力の時代とはどういう意味なのでしょう？権力がない、とはどういう意味なのでしょう？われわれは、この無権力の言明について研究すべきです．バハイの学者として、われわれはこのことについて熟考してみるべきです．社会が無権力になったなら、何が意味されるのでしょう？どうやって社会を統治するというのでしょう？社会は、権力以外の方法で統治できるのでしょうか？

われわれ人間は、個人としても集合体としても、無権力の立場から生活を始めます．子供は無力です．国家もその初期発展段階においては無力です．人類全体もその初期の進化段階においては無力でした．われわれの知識は乏しく、生活の中で生じる困難や危険、病気や気候に対処する能力は限られていました．これらが、初期発展段階の特徴です．これは、われわれが生まれた時に存在していた、一次的な無権力の状態です．そうしてわれわれは、成熟

へ向けて進化します．進化するにつれ、徐々に子供時代、青年期を通過します．これらの段階を経るにつれ、われわれは力をどんどんつけてゆきます．われわれは身体的力をつけ、知的力をつけ、自分自身を統制し生活を送る力を身につけます．人類は今や青年期にあり、これまでで最も力をつけている状態にあります．しかし、この状態にある力は危険です．力は、傲慢と併せて存在しているからです．また、力は競争と、あるいは分裂感と併せて存在しているからです．世界の状態は、まさに青年期にあるのです．

さて、次の段階に移ると、力によって人間関係をつくっていくことができないということに気づきます．実際に、そのような状態での関係は不可能となり、それでも、お互いに効果的に意志の疎通を交わすことができなくなります．成人期の特徴のひとつは、人は成熟に達すると、恋をするということです．「恋をする」とはどういうことでしょう？それは、権力に関して言えば、いわば、自分を愚か者の状態に置いてしまう［馬鹿なまねをする］ことを意味します．つまり、恋をしたその人の前では、全く無力になってしまうのです．その相手は、男性または女性かも知れませんし、自分の赤ん坊かも知れません．とにかく、人は全く無力になったかのごとく、振る舞うのです．これは、自分の力をほおっておき、それを愛で替えた、と言うことです．権力の反対の状態は、愛で満たされるということです．権威主義の性格に関してなされた心理学的研究でさえも、同じ結論に達しています．第二次大戦後、自己反省が大いになされました．ドイツとアメリカという西洋のふたつの国が、恐ろしい暴力をふるったからです．ドイツのユダヤ人と広島の日本人の身に起こったことは、人類の歴史における信じがたいページを構成しています．彼らは、それ以前には想像もできなかったような性質の破壊をもたらしたのです．そこで、そのような行為を起こさせる性格の特徴について、多くの科学者が研究を始めました．彼らの達した結論は、人が力という原則に応じて育てられると、人生で最も重要なものは力を持つことだと信じるように育てられる、と言うことでした．そして、必要とあらば、爆弾を落として多数の人を殺しても構わない、と言うことになるのです．何が何でも力を維持しなければならないので、そうするのです．そしてそれは、権力中心の人の心理に関係しているのです．それから、心理学は次のような問いかけをしました．「権力中心の反対は何であろう？」心理学者の答は、「愛中心」ということでした．われわれは、人間関係において愛の原則に応じて育てられる、新しい人類の世代を必要としています．それは、われわれが、バハイとしての自分達に、次のことを問いかけるよう呼びかけているのです．その問とは、権力中心ではなく愛中心になる子供達、権力や権威主義の力学ではなく、新しい力学を通して世界の危機に対処していく子供達を生み出していく教育システムと家庭教育法とはどのようなものか、ということです．

これらの課題は、バハイの学術の、純粋に理論的な分野の例です．他にも多くのアイデアがありますが、今からやりたいことは、われわれが注意して覚えておくべき調査と研究の道の例を挙げることです．たとえば、今日読み上げられた万国正義院のメッセージの中では、バハイ学術研究会日本支部のメンバーが、いかにして日本社会の安寧に貢献できるか、考慮するよう呼びかけてありました．この優れた顕著な国が、さらに高いレベルで、バハイ信教の原則に応じて、人類の安寧のために貢献できるよう、研究会のメンバーはどのように援助できるか？これはとてつもない仕事です．われわれがしなければならない事のひとつは、この社会でわれわれがどのように子供を育てているかを調査することです．権力中心で競争的で、唯一の重要なことは成功することであると考えることを学び、成功とはもっとお金を稼

ぎもっと権力を身につけることだと決める子供達、そんな子供らをわれわれは育てているのだろうか？もしわれわれがそのような線に添って子供達を育てているならば、権力中心的社会とその付随問題をつくりあげていても驚くべきでありません．

しかし、もし、和合を生じさす者、正義を行う者、互いを平等に扱える者、として子供達を育てたければ、われわれは違った形態の教育が必要です．そのようなシステムの特徴とはいかなるものでしょう？そのカリキュラムとは？このような疑問が、われわれが問いかけ始め、われわれの教育的活動、そしてバハイ的および職業的知識を向けるべき事柄なのです．

バハオラは、われわれの生きている時代とその時代の必要とする事柄に熱心に関心を持つよう、奨励なさいました．歴史におけるこの瞬間は、非常に驚くべき時です．われわれは、この瞬間について熟考するべきです．この瞬間の特徴とはどのようなものでしょう？この瞬間の根本的特徴は、新しい意識をもたらすことです．新しい意識が人類世界に到来してきている、この新しい意識の核となることは、われわれが人間の性質について考え直さなければならない、と言うことです．これは、非常に重大な課題です．われわれの眼前でマルクス主義が崩れ、共産主義諸国が崩壊する時、それはこの時期の明らかなる現象のひとつにすぎないのです．西洋では、またもうひとつの崩壊が起きています．そして私は、日本も、西洋と共にこの試練を受けるだろうと考えます．これらの社会では、非常に重要なことが起きています．社会構造が、内部から弱められているのです．マルクス主義、スターリン主義の諸国では、社会構造は、外見的には外部から崩壊されていましたが、西洋社会の場合、それは白蟻によって食い尽くされている家のようなものです．つまり、その損害の状態は外には見えず、家自体は、立っているのですが、白蟻は、家を支えている構造自体を食い荒らしているのです．そしてもうひと押しでもすれば、家全体が倒れてしまうのです．私は、仕事場でも、このような現象を見かけます．たとえば、家庭や結婚がいかに崩壊しているか、見ることができます．世界中でさらに多くの結婚が崩壊しています．男女の関係もますますと緊張してきています．様々な社会で、不正の兆候がますますと見られます．誰も援助の手を差し伸べてあげたいと思っていない、無力なホームレスの人々がいます．これらは、より暴力的になり、人々の必要としていることに鈍感になってきている社会の兆候です．社会の道徳的標準も崩壊しつつあります．指導者達はもはや指導することはできず、人々も指導者達を信じていません．指導者達もまた、人民を信用していません．至るところで、人間関係が崩壊しています．同時に、環境的危機も私たちの世界の崩壊の兆候のひとつです．環境危機について興味深いことは、それは、世界がひとつの国であることをわれわれが受け入れるよう、圧力をかけていると言うことです．それから性的な問題、さらにＡＩＤＳ問題もあります．ＡＩＤＳのウイルスは、世界中、誰と構わずあらゆる人に感染しうる、恐ろしい性質を持っています．

新しい意識の先駆者である神の顕示者が到来し、地球はひとつの国であり人類はその市民である、と述べるとき、われわれにはふたつの選択が与えられます．そしてこれは驚くべきことです．ひとつは、この概念を受け入れて、地球をひとつの国にし、人類をその市民にすること．もうひとつは、不和の結果により苦しむ、と言うことです．バハイ共同体は、この地球規模の統合の原則を実践しているひとつの例です．しかし、人類の残りは、しぶしぶと地球がひとつであることを認めさせられている状態です．環境的危機、戦争、避難民、移住、ＡＩＤＳのような病気は、すべて、人類の一体性を思い起こさせるものです．これについて、

物事は次のように進むでしょう．つまり、もしわれわれが「地球はひとつの国であり人類はその市民である」という概念を自発的に受け入れなければ、われわれはそれを受け入れることを「強制される」、と言うことです．人生どの面を取っても同じことです．統合、平等、成熟、正義、どの課題にしても、もしわれわれが進んで積極的態度を取らなければ、われわれはそれを強いられるのです．われわれは世界市民として、それらの条件を受け入れなければならなくなるでしょう．それが、意識を昂揚させることの重要な理由なのです．社会を変えるためにまずしなければならないこと、それは意識を高めることです．

人間が何かを達成しようとするには、まず、その何かについてアイデア［イデア］を抱かねばなりません．ラジオについてのアイデアがなければ、われわれは、それを作ることはできません．地球をひとつの国にすると言うアイデアがなければ、われわれは、地球をひとつの国にすることはできないでしょう．それで、まず意識を昂揚させることが重要なのです．神の顕示者は、新しい時代の普遍的意識です．そうして、われわれは、その意識を生じさせる媒介物となるのです．われわれがテイーチングについて語るとき、それは、他の人たちの頭と心を、もっと高い意識のレベルに開放させることを意味しているのです．なぜなら、人に教えるとき、その人は変革されるからです．バハイ学術研究会、そしてバハイの学者達ができる活動のひとつは、彼ら自身の意識を昂揚させる、その意識を言葉や研究や生活の模範を通して、分かち合うことです．

バハイの学者と言うとき、私はあらゆるバハイの人を指して言っています．なぜなら、バハイは皆、真理の独立探求によりバハイになったのであり、それは、真理の探求において科学的方法を用いることを学んだことを意味するからです．これが、学術性に向かって取られる最も重要なステップなのです．ある人たちは、テクニックを学んだ人もいます．しかし、真理を探求する実践こそが、科学的方法における最も著しく、最も重要な局面であるのです．それで、いかなることがあっても、われわれの一人一人が何をできるかについて過小評価してはなりません．いかなる状況下でもそれは過小評価してはならないのです．

質疑応答：

（質問１）先生は、権力と無力、について、それから権力の役割の変化、についてお話しになりました．私にとって、バハイ共同体において面白いと思うことは、補佐メンバーのことです．補佐メンバーには、権力がありません．それで、それは非常に重要な機構だと思います．そしてそれは権力について先生がおっしゃったコメントと関係していると思うのですが．

（答）はい、どうもありがとうございます．それは非常に重要な事柄です．バハイ行政機構は、権力（power）を権威（authority）から分離しています．普通、この世の指導者達には、権力と権威とが両方あります．誰かが権威を有すると、それと共に権力がやってくる．権力を得ると、権威がやってくる．これら二種類の組み合わせは、腐敗されやすい状況を生み出します．つまり、権力と権威が合わせられると、人は、腐敗するのです．バハイ信教では、権力はあらゆる個人に与えられている、と守護者は述べています．個人に権力がある、つまり、行動する力、どのように行動するか、を選択する力です．バハイの機構には権力はありません．機構にあるのは、権威です．バハイ信教では、権威とは、指導するプロセス、指導権を意味します．そして、指導権とは、人々を神の方へ導くことです．信教の諸機構がなすべきことは、人々を神の方へ導くことです．しかし、機構は、人々を神の方へ強制的に行か

せることはできません．機構には、そのような権力がないのです．そのような権力は、個人に属します．個人は、神の方へ行くと決めるかも知れませんし、行かないことにするかも知れません．歴史的には、権威と権力、両方を持っていた人たちは、こう言いました．「もしお前が来ないなら、われわれが力を用いて、強制しよう．われわれには、警察と兵士とがいて、お前にやってもらいたいことを強制させられる．もし協力しないのなら、お前を刑務所へ入れて死刑にする」、と．そのような権力の悪用は、バハイ信教では決して起こりません．なぜなら、権力と権威は分離されているからです．これもまた、われわれが取り組むべき研究分野です．

（質問２）先生は、なぜ女性の方が先に進歩してきたかについて話そうとしておられましたが．

（答）はい、そうでした．周知の通り、歴史的には何が起きたかと言いますと、アブドル・バハが述べておられるように、男性は、その身体的力と知的攻撃性により、人間社会において指導者の役割を担い、力を使って世界を組織してきたのです．彼らは、責任をふたつの部類に分割しました．男性の責任と女性の責任です．男性のそれは、外へ出かけて食糧を集め、女性や子供を危険な動物や敵から守ることでした．その交換に、女性は、男性に従い、子供を養い、家事を行い、料理をし、病人そして当然男性の世話をしなければならなかったのです．彼女らは、男性に対して優しくし、問題を起こさないようにそして「よい娘［コ］であるように」、言われたのです．大体、これが男女関係の方程式だったのです．そして徐々に状況全体が機構化してしまい、社会は、これらの線に応じて組織されていったのです．男性は、力を用いることに関して専門家となり、それは第二次大戦及びそれ以後の多くの戦争のあいだの力の行使において、最高点に達しました．これらが、男性の業績です．そしてアレキサンダー大王や、ナポレオンやヒットラーなどすべての「偉人」たちについて書かれた歴史の本は、結局、戦争を起こし、人々を殺し、多大な破壊をもたらした人たちに関するものなのです．これらが、歴史の「偉人」たちなのです．

さて、女性の方です．彼女らは何をしたのでしょう？彼女らは、教育者になりました．彼女らは、世話を見る人になりました．彼女らは、病人や、虐げられた人たち、困窮状態にある人たち、苦しんでいる人たちの世話を見る人たちになったのです．このような活動や特質は、精神的発展に役立つものです．これらの特質と、女性が長年耐えてきた苦しみとが合わせられ、精神的に成長する条件がつくりだされたのです．女性は男性よりも先に成長したわけです．アブドル・バハがおっしゃるように、苦しみは、成長するために、幸福や成功よりも大きな力となるのです．それで、私は、人間の諸事において、これまで不正がなされてきたけれども、神の全体的な計画においては、正義がなされている、と思うのです．人間達は正義を持って振る舞ってこなかったが、神は正義をもって振る舞われたのです．バハオラの律法時代において、女性は、人間社会の行政の組織と平和の実現において指導者的役割を担う、とバハオラは述べておられます．平和は、主に、女性の貢献により確立されるでしょう．

男性は、権力への没頭のために沢山のものを失いました．人類は大きな代価を払ったのです．男性は、権力を得ることにより、確かに何かを得はしましたが、その過程において多くのものを失ったのです．アブドル・バハも述べておられるように、世界がもっと女性的になる時が来たのです．女性的特質と男性的特質が調和されるまで、男性が女性の特質をもっと

身につける負担がかかるでしょう．現在は、女性が男性のようになることが流行しています．私は、これが逆火［ｻｶﾋﾞ］を起こすのではないか、と恐れています．むしろ、男性が女性の特質を得ることの方がずっと緊急だと思うのです．男性はもっと愛情深くなり、理解を示し、優しくなり、謙虚になり、意志の疎通がうまくなるべきです．当然、女性の方も、社会の運営に活発に、そして平等に参与できるよう、力を与えられる必要があります．しかし、権力と権威の扱い方において男性をまねる必要はありません．

（質問３）先ほど、大陸顧問シュエリンさんが、われわれがなすべきことのひとつは、芽を出し始めた学者達を励ますことだ、とおっしゃいました．この課題はこの国のバハイわれわれにとって不慣れなことです．また、世界中のバハイも関心を抱いていることだと思いますので、先生自身の、芽を出し始めた頃の経験談やおそらく他の学者達を励ましたことについて、お話しできませんか？
（答）ええ、まず、励ますということは、容易なことではありません．と言うのは、「励ます」（encouragement）と言う言葉は、勇気（courage）を与えることを意味するからです．そこで、励ますためには、まず自分が勇気を持っていないといけない．しかし勇気を持つためには励ましが必要である．ここに、創造的な循環ができるわけです．つまり、励ますために勇気が必要、勇気を得るためには励ましが必要なのです．バハイ学術研究会が、繁栄するためには、それが勇気を持つ必要があります．それが勇気を持つためには、少なくとも二つの所から励ましを受ける必要があります．ひとつは、研究会よりもランクの高い機構である全国精神行政会と大陸顧問です．もうひとつは、共同体の中のあなた達です．研究会を助け、活動や運動や目標に参与することにより援助する、あなた達の励ましが必要なのです．そうして研究会は勇気を得ることができます．研究会が勇気を得ると、今度は、それがあなた達を励まし、めいめいが進歩を遂げるように援助できるのです．この課題において中心的となるのが、信頼ということです．今の世界は、不信の世界です．人々がお互いを信頼することをやめた世界なのです．われわれは、その信頼感を再び確立したいのです．われわれは、個人が自分自身とその能力や才能を信頼するような状態をつくり出したいのです．校閲者が、このように、あるいはあのように書いたらどうか、という提案をしたときに、著者がそれを批判やけなしとして受け取ったりせず、むしろ学術のレベルを引き上げるプロセス助長のために援助しているのだ、と見なせるような、そのような状態を、われわれは、つくり出したいのです．いったんそのような信頼感が確立されると、学術は繁栄するでしょう．北米では、そのような信頼感が確立するまで、しばらく時間がかかりました．われわれは初心者でした．われわれはやり方を知らなかったし、以前に経験もなかったし、多くの過ちを犯しました．それで、われわれは、励ましもされなかったし、励ましてもいませんでした．しかし徐々に、試行錯誤を繰り返しながらねばり強く努力することにより、どうしたら励ますことができるかを学んでいったのです．でもそれはよいことです．試行錯誤にはなんら問題はありません．この共同体では、他の共同体であったようにそのプロセスがそれほど困難で苦しいものにならないことを願っています．もっと容易に、もっとスムーズに進むことを願っています．ひとつのことは確実に言えます．全国精神行政会と大陸顧問そして研究会の間に非常に密接な関係のあるところでは、それのないところより、研究会の経験はずっとよいものであった、と言うことです．

（質問４）われわれが配慮すべき最大の課題のひとつは、書くことや話すことにおいてバハイの原則やアイデアを述べて、さらにバハオラの名前をそれらに結びつけることだと思います．それはわれわれがこれから取り組んでゆくべき目標です．
（答）ええ、それは本当です．それは恐い［ｺﾜｲ］ことです．私たちが、そうすることを長い間避けてきた理由は、それでした．もし万国正義院が、バハオラの名前を出すときが来た、と言わなかったら、もっと長く、その態度を続けていたでしょう．さて、われわれはどうしてこの現象をそれほど恐れているのでしょう？あるレベルでは、先に話しました、異常であること、他人と異なっていることに対する恐れがあります．この恐れは、バハオラの名において概念を紹介することと逆方向に作用します．そこで、われわれは恐れを克服しなければなりません．ここで、ちょっとした心理学の原則が役に立ちます．われわれが恐れを感じるとき、それはわれわれがあるものによって脅かされていることを意味します．今取り上げている問題に当てはめると、最大の脅威は、ひとつは他人によって拒絶されるのではないか、と言うこと、もうひとつは、馬鹿にされるのではないか、と言うことです．唯一の解決策は、われわれがバハオラのために拒否されることを受け入れることだ、と私は思います．結局、バハオラは、最も重要な書簡のひとつである「アフマドへの書簡」の中で、われわれは彼のために拒否されるであろう、と述べておられますのですから．そして実際、
われわれは、拒否されたときには、バハオラがこうおっしゃったことを忘れてはなりません．「そしてもし汝、わが道において苦難に陥り、われのために辱めを受けても、それによって煩わされるなかれ．汝の神であり、汝の祖先の主である神を信頼せよ．なぜならば、人々は、妄想の道においてさまよい、．．．」「アフマドの書簡」でこのような言明がなされているのは、非常に興味深いことです．これは、われわれはそのような拒絶のプロセスがやってくることを予期するだけではなく、歓迎すべきである、と言う意味です．そして、その拒絶に対して悩む必要はないのです．ではどうやって拒絶の可能性を歓迎できるでしょうか？それは単に、英知と中庸と注意と威厳とを持ってバハオラのことを宣布すればよいのです．そうして、相手が拒否したとしても、われわれは心配する必要はありません．そのような拒絶は受け入れられます．そのような精神的犠牲の行為は、多大な影響を及ぼします．と言うのは、バハオラは、先の言葉の直後に、こう述べておられるからです．「なぜなら、人々は妄想の道においてさまよい、自らの眼にて神を見、自らの耳にて神の旋律を聞く力に欠けているからである．」われわれは、苦難や辱めを恐れる必要はないのです．苦難とは、イランのバハイに起こったような出来事です．辱めとは、バハオラが「アフマドへの書簡」でわれわれになすように言われたことをした場合、われわれの身に起こるであろうことです．「わが敵に対しては炎のようであり、わが愛されし者らに対しては永遠の生命の川のようになれ．そして疑う者ではあるな．」火の炎には多くの意味があります．火は熱を与え、冷たいものを溶かします．火は純化の力もあります．火はものを照らし出し、ものを焼きます．火は多くのことができるのです．火ができることは、ほとんど肯定的なものです．最も重要なことは、火は、神の友人でない人々の冷たい心を溶かすことができるということです．心が溶けるとき、その心はものをもっと受け入れやすくなります．敵に火を与えるとき、その敵は、その性質に応じて反応を示します．もしそれが凍っていれば、溶け、生命を呼び戻します．もし死んでいれば、燃えてしまいます．これが、冷たい心に火を与えたときに起こることです．

バハオラは、そうするように述べておられます．そしてその影響力については疑うなかれ、と言っておられるのです．バハオラの名前を宣布するにあたって、「わが道において苦難に会い、われのために辱めを受けても、それにより煩わされるなかれ」と述べておられます．次に、バハオラは、世界の状態について描写しておられます．「なぜならば人々は妄想の道においてさまよい、自らの眼にて神を見、自らの耳にて神の旋律を聞く力に欠けているからである」と言っておられます．さらに「このように彼らの迷信は、彼らと彼らの心の間を遮るベールとなり、崇高にして偉大なる御方、神の道から彼らを遠ざけてしまったのである」と述べておられます．ここに、われわれがなすべきことが書いてあるのです．聖なる医者は、診察を行います．その結果、人々は妄想の道を歩んでいると分かります．彼らの信じていることは真実ではなく、彼らは自分の眼で見、自分の耳で聞くことができないのです．ゆえに、テイーチングとは、人々が妄想から身を断つことを援助し、彼らに勇気を与え、彼らがいかにして自分の眼で見、自分の判断力で判断し、一人で実在性について理解することを助けるプロセスであると言えます．

これが、他人に勇気を与えるプロセスです．われわれはこれらのことをすべてすることができます．恐がることはありません．人々が信じていることのほとんどは妄想です．それらは取り去ることができるのです．それでよいのです．これは愛の行為です．これは励ましの行為です．そうするにつれ、われわれは、人々と真理との間に入り込んだ迷信を取り去ることになるのです．そのプロセスを通して、われわれは、彼らの眼を開かせ、耳を開かせるのです．われわれは彼らが真実を見れるようになしたのです．バハオラの名において語るとき、攻撃されることは疑えません．しかし、その逆の面は、われわれの言葉を聞く人もいると言うことです．そして彼らは見ることができ、迷信をなくし、それまでと違ったプロセスが始まるのです．

バハオラは、さらに、どのようにすばらしいことが起きうるか述べておられます．「おおアフマドよ、この『書簡』をよく覚えるがよい．汝、日々これを唱え、それを差し控えるなかれ．なぜならば神はまことに、それを唱える者に、百人の殉死者の報いと両方の世界における奉仕をお定めになったゆえに．」これは非常に重大な言明です．この書簡を唱えるならば、百人の殉死者の報いを得られると言うのですから．

この書簡の初めの所で、人類の心の最愛なる御方が現れた、とバハオラが言っておられることを思い出して下さい．それだけでなく、その人物は、バブの預言をすべて満たしている、そしてバブはそれ以前のすべての預言を満たしている、と述べています．それで、バハオラは、バブについてかなり話しておられます．というのは、あらゆる顕示者は、常に、その前に現れた顕示者について語るからです．バハオラは、「バヤン」を「母なる書」として述べておられます．「バヤン」において、神を信じる者は、Shaheedと呼ばれています．Shaheedとは、殉死者を意味します．殉死者は、何かについて証言する人という意味です．証言には二種類の方法があります．ひとつは、生を通して証言すること、もうひとつは、死を通して証言することです．ですから、人は、生ける殉死者にもなれるし、死せる殉死者にもなれるのです．

つまり、バハオラはこうおっしゃっているのです．この書簡を読み、それを毎日定期的に唱え、それによりバハオラについてより深く理解できるようになる者は、バブの真実性について証言した者らの百倍の報いを得る、と言うのです．その人は、バハオラの実在性に対す

る生ける殉死者となったのであり、これは、バブの実在性について証言した百人の人々の報いである、と言うのです．バハオラについて証言することは、非常に難しいことです．証言する勇気を得るために助けとなる手段のひとつは、「アフマドへの書簡」そのものだと思います．バハオラの名前を宣布したいのであれば、「アフマドへの書簡」を唱えることを提案します．それはわれわれが必要とする勇気を与えてくれるのです．その中で、バハオラは、われわれが何をなすべきか、どうなすべきか、その後何が起こるか、について述べておられ、すべてがうまく行くのだ、と安心させて下さいます．すべて、愛情深い親が子供に向かって言う言葉です．はい、ある人々は、あなた方を馬鹿者扱いにするかもしれません．彼らは理解していないからです．彼らは見ることができないし、聞くことができないからです．彼らの眼と耳を真実の光と旋律の方へ開かせることができるのは、あなた方の特権となる．

どうもありがとうございました．